

北白川宮能久親王台湾攻略戦関係年表

NO.	典拠	日時	場所	発信者	受信者	経由	記事(赤字は電文をさす)
1	E	5月10日					台湾総督府設置 (台湾総督 樺山資紀)
2	E	5月23日					台湾民主国宣言 (總統唐景崧)
3	E	5月29日					樺山総督・近衛師団、三貂角上陸→以後、台湾征伐戦争発生
4	B	5月31日	澳底				近衛師団長北白川宮能久、台湾上陸
5	B	8月28日	彰化				彰化ヲ占領セリ
6	B	8/29~	彰化				彰化附近ハ台湾中最悪疫流行スル地ナル上ニ8月ノ炎熱下ニ一万余ノ師団ノ將兵駐屯シ加フルニ麻刺里 equal 風土病ニ対スル衛生上ノ研究モ未タ十分ナラサリシ為、忽チ病魔ノ襲フ所トナリ、野戦病院一箇ニ千人以上ヲ収容セルモ尚不足シ市中至ル処患者充満シ慘澹タル情況ヲ呈シ九月下旬ニ於テハ全師団中健全ナルモ僅カニ五分ノ一ニシテ二十七八人定員ノ歩兵中隊カ百二十人少キハ三十人ヲ余スノミトナリ山根少将、中岡中佐、緒方参謀等皆不帰ノ客トナレリ
7	B	~9月下旬	彰化				当時師団長殿下ハ御自ラノ危険モ顧ミス朝夕不幸ナル病兵ヲ見舞ハセラル御食物或イハ御日用ノ品々サハ節約シテ病者ニ頒チ与フ等只管慰撫ニ努メサセラレシカ九月下旬ニ至リ病魔衰退ノ色アリ
8	B	9月22日	彰化				高島副総督ヨリ南進運動ニ関スル命令ヲ受領
9	B						(暴風雨のため出発延期)
10	B	10/6~					南進の為彰化を出発、嘉義を経て台南に向かう
11	D	10月17日	嘉義				「夜に入りて発熱せさせ給ふ。舌の白苔を被れる外、徴候の認むべきなかりき。達(軍医)は瘧と診断しつ」
12	B・D	10月18日	嘉義				御寒ケノ気味アリ 夜38度4分/「午前3時悪寒、腰痛」「午後1時20分後頭重、口渴全身倦怠」茅屋にて就寝
13	B・D	10月19日	台南				38度2分強テ睡子ヲ召サレシコトヲ語ヒ奉ル。/夜38度1分「全身倦怠」瘧の肥大
14	B	10月19日	台南				賦性ハ十九日夜逃走シ
15	B・D	10月20日	~湾裡				担架ヲ造リ差上グルニ工合シテ御喜ヒアリ、御軍装ノ儘御靴ヲ脱セラレテ進マセラレ依然師団ノ指揮ヲ執ラセ給フコト平素ト異ラセラレテ 夜四十度一分/朝、体温38.5脈92食欲なし、夕、体温39.8脈92、下痢
16	B	10月21日	台南				(第二) 師団ハ秩序維持ノタメニ支隊ヲ入城セシメタリト報ニ接シ諸隊ヲ予定ノ位置ニ止メ各高等司令部ノミ台南ニ入ルベキヲ命ジ
17	D						朝、体温39.5脈100著しく疲れ、夕、体温40.1脈101倦怠感甚だしき、夜下痢
18	B	10月22日	台南				近衛師団ハ…22日前衛ヲ以テ台南ニ入城セリ
19	B	10月22日					担架ニテ発セラレ…夜台南ニ入ラセラル。…第四師団長伏見宮殿下モ在ラセラル御兄弟ニテ久々ノ御対顔アリ
20	C	10月22日					午後二時台南ニ到着セリ。当時非常ノ混雑ニテ司令部ノ位置モ容易ニ定マラサリシカ。夕刻ニ至リワズカ機ニ一軒ノ家ヲ捜シ出シテ取敢ヘ司令部ト定メ門内右側ノ一室ヲ齋殿下御療養所ノ所ト為シ御帰京途此処ニ起居アセラレシカ
21	D	10月22日					朝、体温39.6脈80、夕、体温40.2脈101口渴倦怠食欲減退瘧の肥大著し、下痢
22	D	10月23日					朝、体温39.2脈120 宿舎を変更 午後3時病状悪化
23	D	10/23~27					総督府軍医部長石原惟實第二師団軍医部長谷口謙、西郷吉義来診 夕、体温39.9脈120軟便三度、夜譫言此日より客に逢わせ給はず。貞愛親王に逢わせ給ひしを終として、次いで至れる高島軍司令官はむなししく帰リぬ。
24	D	10月24日					朝、体温39.0脈110呼吸30、夕、体温39.32脈119呼吸33。口渴、舌に褐色の苔右肩甲下隅下の濁音呼吸音口雜に右胸に水泡音「肺炎の徴なき」尿蛋白
25	C	10/23~27					台南府ノ占領ト共ニ台湾モ一先ツ平定ニ帰セシカバ今ハ殿下ノ御静養ニノミ只管苦心セシモ御熱度容易ニ降ラズ摘テ加ヘテ忌ハシキ肺炎症サヘ増発シ漸ク容易ナラサル御病状トコソ成リ往キケン。吾々モ初メノ程ハ毎朝御病床ニ詣リテ御機嫌ヲ伺候シ来リシカ後ニハ(軍医ノ誠告ニ困リ其スラ叶ハヌコトト爲リ、只々僕ニ軍医拜診ノ帰徒ヲ要シ御容体ヲ聴クノ外ナカリキ。今日ハ熱度幾何、呼吸何程ニテ昨日ヨリハ少ク御鎮静ノ方ナリト聞クトキハ吾々モ悸動迄先ツ鎮静ニ赴クモ、或日ハ未タ一言モ発サル軍医ノ顔色誠ニ心配ナルヲ見テハ、吾胸先ツ塞リテ問ハントスルノ辞モ敢ヘサルコトアリキ。伏見宮殿下総督閣下軍司令官閣下等モ日々御病床ニ見舞ハレ、帰途ハ何時モ嘆息ヲ洩ラサルノミニテ一言モ発セラレサリシカ、日ヲ累スルニ從ヒ此等訪問者ノ顔色モ漸ク憂鬱ノ淵ニ沈ミ往ク許リナリキ。
26	A2-4/D	10月25日 21:50	台南	石原忠恵 (軍医総監)	石原忠恵 (軍医総監)		38.1~38.7 一昨日よりやや良好(朝、体温38.5脈104呼吸30、夕、体温38.0脈120(軟弱)呼吸30便秘肩甲骨下で捻髪音時々応答不明に)
27	A2-5/D	10月26日 24:00	台南	石原忠恵 (軍医総監)	石原忠恵 (軍医総監)		38以下 大概昨日二同ジ(朝、体温38.2脈118、夕、体温38.0脈119呼吸29、舌潤い面胸手背に粘汗、四肢振蕩)
28	B	10月27日					樺山総督御病床ニ伺候シ台湾モ殆ト平定ス。畢竟殿下ノ帥ヒサセ給フ近衛師団ハ最初ヨリ其功最著シク其任務モ已ニ完了セリト申ケル時御眼ヲ開カセラレ御顔給ヒシカ是確カニ御静養メアラセラレシ最終ナリキ
29	A2-6/D	10月27日 18:30	台南	石原忠恵 (軍医総監)	石原忠恵 (軍医総監)	海電電線不通ノ為ニ台北ニ電信電報機	38.7 今朝来衰弱大ニ増シ(朝、体温38.6脈120、夕、体温37.6脈120呼吸30、舌及び四肢振蕩・全身粘汗・精神朦朧・濁音捻髪音左胸に)
30	D						3時30分脈不正にして135。5時体温39.6脈136呼吸45四肢厥冷にして冷汗、人事不省
31	/D	10/28 7:16					北白川宮能久親王死亡 7時15分病革になりて幾ならぬに覺せさせ給ふ。貞愛親王、樺山資紀、高島勲之助、乃木希典の諸將、別れを御遠敷に告げあひらせ、秘して喪を発せず。
32	C	10月28日					十月廿八日ノ朝ハ御病状愈々悪シク、彼所是所二人ヲ走ラセ、又急ニ内地ニ電報ヲ発スル等容易ナラズ事應ニ迫リ、高貴ノ方々モ時ヲ移サス参集サレ軍医等ハ時々刻々拜診シテ、御容体ヲ一々同ヘ述ツツ在リシカ、一刻ハ一刻ヨリモ悲シキ御容体ニ過マセラレ、日ノ西山ニ傾クト共ニ心ナキ暮鴉サヘモ今日ノ名残リノ夕日ヲ惜シメテカ一層悲シク鳴キ叫ビテス。
33	A⑤	10月28日 8:20	台南	大島少将	参謀(次長)川上(後六)中校		今般舞去被為連タルモ、危篤ノ旨ヲ以テ、至急御船被出達書ナリ
34	A④	10月28日 9:30	台北	角田海軍少将	参謀総長へ	台南高島副総督ヨリ電報	今曉来病氣頓ニ進ミ今は危篤ナリ
35	A③	10月28日 10:45	台北	角田海軍少将	参謀総長へ	台南樺山総督ヨリ電報	御危篤、甚心痛ニ不堪
36	A⑥	10月28日 16:20	台北	角田	参謀総長へ	台南樺山総督ヨリ電報	廿八日午前七時十六分薨去アラセラレシタリ。…付テハ御病氣ノ名義ニテ軍艦ニ成ラセラレ、本日横浜ニ向ヒ、安平御出帆
37	A⑦	10月28日 17:00	台北	角田海軍少将	参謀総長へ	台南樺山総督ヨリ電報	西京丸ニ御乗組旗艦吉野護衛、二十九日午前十時安平出発、横須賀ニ向ヒ直航。来ル四日御着ノ筈
38	E	10月29日					「永く炎天熱地を踏み、千瘡万痍を冒させられて、征台の偉業を全うせられたる北白川宮師団長閣下には、頃者マリア熱に罹らせられ、一時は熱度も低からざりし由にて、目下戦地の病院にて只嘗ら御静養」(『東京日日新聞』)
39	E	11月4日					北白川宮の遺体、横須賀に到着
40	E	11月6日					各紙、北白川宮の死亡を報道
41	E	11月9日					「北白川宮能久親王御容体書」掲載「同二十八日(中略)一時御脈稍々復セラルルモ忽チニシテ復タ衰フ、午前七時十五分御症最モ御危篤ナリ。同二十九日、三十日、三十一日及本月一日、二日、三日、四日御症並ニ御業ハ二十八日ニ同ジ、本月五日午前七時十五分薨去アラセラル。」「悪性麻拉等里亞熱ニ肺炎ヲ併發シ、脳中梗ヲ侵サリ遂ニ心臓麻痺ニ陥リ薨去アラセラル」(官報「北白川宮能久親王御容体書」)

出典 A) 大本営副官部「自明治廿八年八月至同十二月着電報(十五)」B) 陸軍省「台湾征討の経緯及び師団上陸前の状況」C) 學龍山人河村秀一「故北白川宮殿下征台略史」(いずれもアジア歴史資料センター「防衛省防衛研究所」) D) 衆議院(森林太郎)「能久親王事績」(1907年 春陽堂) E) 原田敬一「日清戦争」(吉川弘文館2008)